

れ、筆者に同定を求められた。今回の発見地は、同氏が居住されている太平洋に面した日高の沙流郡門別町富浜の沙流川河口付近であるが、さらに隣接した鶴川町の鶴川河口付近でも見つかっている由。いずれも向陽の海浜砂地で、オカヒジキやシバムギのほか、ハマアカザ、ウラジロアカザ、ハマベンケイソウ、さらにヒロハウシノケグサ、カモガヤ、コヌカグサなどのイネ科の帰化植物に伍して生育し、可成りの個体が散生することである。

周知のように本種はハマダイコンと同様に海岸の砂地に生育し、大形の蒴果が風あるいは海水(流)などによって運ばれ分布域を広げることから、本州の日本海沿岸各地へ拡がるのは時間の問題と考えていた。北アメリカ西海岸での実例によると、オニハマダイコンは年平均50-60 km、すなわち約2,000マイルの距離があるカリフォルニア湾(サンフランシスコ)からアラスカ(コジアク諸島)まで分布域を拡大するのに、約50年間を要したとされている(Barbour and Rodman 1970)。

したがって本種が10余年を経て本州の日本海沿岸から、海を隔てた北海道の太平洋岸へ拡がったとしても異とするに当たらない。恐らくその中間

地域である青森県や北海道の太平洋岸各地にも、既に生育しているものと思われる。

このようなことから、現在、オニハマダイコンは予備帰化植物の域を脱し、完全な定着帰化の段階にあるものと判定される。なお本種は原産地での生育状態を勘案すると、幅広い気候上での適応性を有すると考えられるので、古い逸出起源の帰化植物であるハマダイコンと同様に近い将来、北海道～琉球に至る全国各地に分布範囲を拡げ、我が国の普遍的な海岸植物の一員として君臨するものと思われる。今後、未だ記録のない本州の太平洋岸各地への分布について、同学諸氏の注意を望みたい。終わりに、貴重な資料を提供された高橋誼氏に対し感謝の意を表する。

*Cakile edentula* (Bigel.) Hook., a native of the east of North America, was recorded to be found for the first time in 1982 as a new alien at the coast of Niigata Prefecture of the Japan Sea side in Honshu. Recently, this fleshy plant was newly found in the sandy beach of the Pacific Ocean side of Hokkaido, Northern Japan, on July 30, 1995.

(東京歯科大学)

## ヒロバスゲ類の区別と分布（山中二男）

Tsugizo YAMANAKA: Miscellaneous Notes on *Carex insaniae*

ヒロバスゲ、アオバスゲおよびアオヒエスゲは、種としては *Carex insaniae* Koidz. にまとめられ、それぞれ var. *insaniae*, var. *papillaticulmis* (Ohwi) Ohwi, var. *subdita* (Ohwi) Ohwi とする(大井 1953, 1982)のが普通で、吉川(1957, 1960)のよい図がある。この類は、まず葉の幅の相違で区別するが、ほかに花序や走出枝をとりあげることもある(小山 1964)。ここでは、主として四国でアオバスゲとアオヒエスゲを見直して気付いたことを、いくつかまとめておく。なお、証拠標本は東北大學理学部生物学教室植物標本室(TUS)におく。

**形質** これまで、葉はヒロバスゲが最も広くて、幅が 8-10 mm ときに 15-20 mm になり、ア

オバスゲは 4-8 mm、アオヒエスゲは狭くて 2-4 mm とされている。四国山地の 20か所あまりで調べた約 50 株では、幅 4-9 mm そのうち半数以上は 5-7 mm で変異は少なく、はっきりしたアオバスゲの形である。この大きさのものは、丘陵や海岸近くにもまれにあるが、低地にはほとんど幅 3-4 mm、花後に伸びた葉でときに 5 mm になるアオヒエスゲが見られる。

ヒロバスゲでは、普通の花序だけでなく、茎が高くならず株もと近くをなればうような花がつき、これをほかと区別する特徴の一つとみなしがちである。ところが、四国山地でアオバスゲとしたものでも、こうした地表近くの花序がある場合が、調べたうちの 50% をこし、また多少は伸びる

が正常な高さにならないことも30%ある。したがって、この形質は、ヒロバスゲに限られたものではないとみなければならない。アオヒエスゲでも、吉川（1960）がふれているように、ごくまれにそうした例がある。果胞の嘴は、アオバスゲもアオヒエスゲも細長く、口部の歯は明らかである。

ヒロバスゲ、アオバスゲとともに、叢生して走出枝を欠くか目立たないといわれている。四国のアオバスゲも多くはそのようであるが、きわめてまれに短い走出枝の出ることがある。アオヒエスゲは、根茎が短いかときにすこしだけ大きくなってしまうが、めだった走出枝を見ることはあまりない。

以上のように、ヒロバスゲとアオバスゲとは、花序の性質が共通し、またアオバスゲとアオヒエスゲの走出枝による違いも明らかでないことがわかった。これらは、外形ではやはり葉の広狭で区別するべきものと思う。

**分布** ヒロバスゲは、南千島、北海道から本州の近畿地方北部と隠岐までたしかな生育地が知られ、分布は日本海側に偏っている。アオバスゲは、本州では北は東北地方まで、西は中国山地にもあり、四国山地と九州にも分布し、日本海要素とみなされるヒロバスゲのような分布型とは異なっている。アオヒエスゲは、千葉県から東海、近畿、四国、九州のおもに太平洋側に生じ、中国、四国地方の瀬戸内側では山地はもちろん低地でも、記録は不確かである。この事実は、アオヒ

エスゲはヒロバスゲに対応する襲速紀型の分布をしていると考えられる。なお、アオバスゲは、四国ではほとんどが海拔1,000 m 以上の山地の冷温帯に生ずる。それにたいして、アオヒエスゲは、500 m 内外以下の暖温帯に見られ、超塩基性岩地帯にめだって多く、この傾向は本州でも杉本（1984）が指摘している。

スゲ属植物のうち、同一種で分布の主領域が太平洋側と日本海側に分かれる例として、カンスゲとホソバカンスゲがあり、日本海側のものの葉が狭い。しかし、ヒロバスゲは、堀田（1974）が説明しているような、日本海側に広葉の草本が見られる例の一つとしてあげることもできる。

#### 引用文献

- 堀田 満 1974. 植物の分布と分化. pp. 283-287. 三省堂、東京.  
 小山鐵夫 1964. かやつりぐさ科. 北村四郎、村田源、小山鐵夫. 原色日本植物図鑑草本編III: 210-301. 保育社、大阪.  
 大井次三郎 1953. 日本植物誌. p. 200. 至文堂、東京.  
 —— 1982. カヤツリグサ科. 佐竹義輔ほか編. 日本の野生植物. 草本I: 145-185. 平凡社、東京.  
 杉本順一 1984. 静岡県植物誌. p. 710. 第一法規出版、東京.  
 吉川純幹 1957, 1960. 日本スゲ属植物図譜1: 132-135, 3: 360-361. 北陸の植物の会、金沢.  
 (高知市 [redacted])

#### リュウキュウタラノキについて（山崎 敬）

Takasi YAMAZAKI: On *Aralia elata* (Miq.) Seem. var. *ryukyuensis* J. Wen.

先に琉球のタラノキ属の1種は台湾に分布するウラジロタラノキ *Aralia bipinnata* Blanco と同じものであると報告した（本誌 62: 189, 1987）。しかし、琉球のものは小花梗が短く、小葉の鋸歯の切り込みが浅い点で異なっていたが、一か所で4個体の花しか見ていなかったので、個体変異なのかどうかわからなかった。沖縄の沢嶽安喜氏から沖縄の各地の標本を送ってもらったところ、沖縄のものはフィリピン、台湾のものと異なること

が明らかになった。小花梗は花の時で長さ 1-1.5 mm、果時に 1.5-2 mm であって (Fig. 1, a), 小集散花序の花は密に集まっている。*A. bipinnata* の小花梗は花の時 3-5 mm、果時に 4-7 mm あって、花や果実がまばらについている (Fig. 1, b)。琉球のものは葉柄に殆ど刺がなく、刺のある場合には下記のように短くて太い。小葉は浅い尖った鋸歯を持つが、*A. bipinnata* は葉柄に短く細い刺があり、小葉の鋸歯は荒く明瞭で、先は刺